

# 福崎町文化

第26号 平成22年4月15日 兵庫県神崎郡福崎町福田176の1 福崎町文化センター発行



## 柳田国男と

## 「コミュニケーション能力」

『柳田国男全集』編集委員 小田 富英



一、はじめに

私は、昨年三月、定年まで一年を残して、三十六年間の小学校の教員生活に終止符をうった。最初のうちは、淋しくはないのかとか、全うして欲しかったと言われていたが、辞めてからこそ広がる人生もあり、その決断に悔いはない。そして、その理由のひとつに、この一年間に二回も、柳田の生まれ故郷の福崎でお話することができたことがある。今回のこの原稿で、三度目となり、悔いがないどころか、幸せさえ感じているほどである。そこで、今の私の一番の関心事を中心に述べさせていただこうと思う。

現代の教育課題は、多種多様であり、また、日を追うごとに新たな問

題が噴出してくるかのようである。

しかし、私には、現代の一番大きな課題は、何と言っても、ただひと言「コミュニケーション能力の低下」からくる問題に見える。最近話題の「言語力の低下」も同じ意味である。そして、それは、子供に限らず、どんな世代においても、どんな職種においても言える共通の課題であると思うのである。

この問題意識から、「柳田国男とコミュニケーション能力」について考えてみたい。

二、「言葉あわせの術」の達人

私は、柳田を紹介する時に、「村の信仰」（『私の哲学』思想の科学研究会編、中央公論社、昭和二十五年一月刊。刊行中の『柳田国男全集』第三十二巻に収録）というインタビューを引用することが多い。それは、内容的にも話題性に富むということだけでなく、柳田の生前、それも教育から立て直そうと活動し始め、再

び時代の表舞台に登場してきた時期のもので、なおかつ活字になる前に柳田が目を通してしている可能性が高いためだ。その「村の信仰」には、簡単に、しかも的確な表現で柳田の経歴が語られている。さらに、その経歴のあとに、次のような文章の柳田紹介が載っているのである。

「柳田国男氏は、言葉あわせの術に達した人である。年齢と立場とにかかわらず、相手の話を直ちに了解して、それを核として、自分の話をされる。若い者の話を、これほど早く、正しくのみこむ老人を他に知らない。」

言い替えれば、柳田は、「コミュニケーション能力」の達人ということである。

話は変わるが、昨年の「柳田国男の会」（年に一回集まっている柳田国男研究者の集い）の席で、鶴見太郎氏とこの話になった。私は、「多分、お父さん（鶴見俊輔さん）がインタビューをしたと思われるので、この紹介の文、とくに「言葉あわせ」という言葉は誰が作った言葉なのか聞いてみてください」とお願いをしたのである。しばらくして、太郎氏から葉書が届いた。それには、「家に帰ってすぐ父に確認したところ、

取材記録を編集する段階で鶴見俊輔が考えて入れた」と書いてあったのである。鶴見俊輔の柳田像ということになる。これでまた、本文の魅力が倍増したと、私は思う。

では、柳田国男は、どのような過程で、「コミュニケーション能力」の達人になり得たのであろうか。私には、柳田にもともと備わっていた個性、天性の他に、大きく二つの要素があるように思える。ひとつは、柳田の一貫した「話す・聞く」を重点とした国語（日本語）教育論、言語論である。そして、もうひとつが、旅を基礎とした柳田民俗学の体験の蓄積である。後者については、この一月の「福崎発 旅の学校」での講演「柳田国男の旅行道」で、大正九年の「豆手帖から」の旅の中の「子供の眼」の文章を紹介しながら、「目は心の窓」の「コミュニケーション能力」についてお話をさせていただいたので、ここでは、前者について述べてみたいと思う。

ここで述べる「一貫した」とは、教育体制も理論も方法も正反対の戦前、戦後も変わらずという意味である。では、どのように「一貫」しているのか、いくつかある具体的な例の中から二点に絞って論じてみたい。

### 三、「聴き方」教育の一貫性

柳田が、国語教育に提言し始めていくのは、方言や昔話の採集を続けながら、その採集協力者に多くの教員たちが集ってきたことと無関係ではない。時期的には、昭和初期であり、その蓄積は、「昔の国語教育」（昭和十二年七月）として結実している。それは、近代学校教育における国語教育（私たちは「学校国語」と呼ぶ）を批判し、近代以前（前代）の普通の文字を持たない人々の伝承世界に言葉の教育の真髄を「発見」（庄司和晃氏）した論文である。柳田はその最後を次のように締め付けている。

「つまり「聴方」といふ課目を大切にすればよいので、それも仮設の空な言葉でなく、出来るだけ生きた実際のものを聴かせなければ身にはならぬ。（略）言葉を人生に役立たせる為に、我々は国語教育をして居るのだといふことを、全部の当事者が三省して見なければならぬ」

柳田が、「聴く」ことを重視したこの時期のエピソードがある。昭和八年一月に、『人情地理』という雑誌が創刊されている。その創刊号で、「耳で聞いた話」を全国から集める

という「呼びかけ」が載ることになる。「柳田国男先生選」と入った「呼びかけ」は、柳田の意図に反して、地方に埋もれている珍しい郷土色豊かな話とされてしまった。案の定、集まったのは、柳田の望んでいたものではなく、がっかりしたのであろう。柳田は、三月号に「我々の望むもの」という次のような一文を掲載することになる。

「『耳で聞いた話』の新しい計画は言語写生の興味を流行させたいといふに在つたのです。子供でも老女でも又は路傍の人々でも、最も単純な者の話した通りを、聴いて感じたまゝ、に書き現はす技術を、読者諸君の間に競争していただきたいと思つたのです。（略）とにかく『耳で聞いた話』は簡単明瞭な、むつかしい言葉のまじらない会話です。」

「聞く」を後半、「聴く」と変えている点も注目だが、編集者の誤解から生じたトラブル解消のために、柳田の本音がわかりやすく出ているところがいい。柳田は、この文のなかで、「或農夫の茶飲み話」「祖父が私に聴かせてくれた話」「汽車で隣席の人がしやべつて居た話」という三例を示し、いい話が集まったら、

一冊の本にして世に伝えたいと希望を述べている。ここに、明治四十四年、「願はくは之を語りて平地人を戦慄せしめよ」と刊行した『遠野物語』と共通する柳田の思いを読みとることができると思うのだが、このことは、筆を改めて述べることにしたい。

「言葉を人生に役立たせ」るためにも「聴き方」教育が重要だとする柳田の国語教育論は、戦後の国語教科書づくりにも生かされ、柳田の「一貫」性は持続する。そして、その教科書（東京書籍『新しい国語』）も、昭和三十年代に入るところ、知識注入主義の「学力信仰」に負けて消えていく運命を辿るのである。

柳田は、この時、「聞きことばの将来」（『ことばの講座』第二巻、東京創元社、昭和三十一年七月。『柳田国男全集』第三十三巻に収録）という一文を書いている。

「今後、どのようにしていったらよいか。私はまず聞きかた教育ということをあげたい。そのための教科書を作るといふことはできないけれども、教科書の前後に、いう者が聞く者に対して義務を負うような気持で話する。もちろん相手が理解をするということを限度に

して、これをまず説きたいものだと思う。それには一つだけこつがあつて、それさえすればいいと思ふのは、聞き手が「わかりません」という聞きことばを「あなたのおっしゃることはわからない」ということを、ごく気楽に口に出すことができたなら、この問題は解決されていくものと私は信じている。」

このように、昭和の初期から提言してきた「聴き方」教育の現状は、いつも、柳田の思いとはほど遠いところにあつたのである。

### 四、柳田言語論の一貫性

前述の「昔の国語教育」も含めた柳田の国語教育論を収めた『国語の将来』が刊行されたのは、国策として「国語の愛護」が叫ばれていた昭和十四年のことである。この書の序となる「著者の言葉」は、薄っぺらい「国語の愛護」論を「この日本語をどうすることが、愛護であるかといふ点について、いつもよそ行きの語を使はなければ、愛護で無いとも思つて居るらし」い人々が多く、それは「むだと言はうよりは寧ろ有害」と批判して、次のように言い切るのである。

「私は行く行くこの日本語を以て、

言ひたいことは何でも言ひ、書きたいことは何でも書け、しかも我心をはつきりと、少しの曇りも無く且つ感動深く、相手に知らしめ得るやうにすることが、本当の愛護だと思つて居る。それには僅かばかり現在の教へ方を、替へて見る必要は無いかどうか。すくなくとももう一度、検討して見る必要があると思つて居る。」

現在でも通用するものの言い方で驚くのは私だけではないはずだ。柳田の「言ひたいことは何でも言ひ、書きたいことは何でも書く」教育は、戦後の「学校国語」の目標でもあったが、いつも不十分のまま、その上反省も無く目先を変えて流れ過ぎてしまふのである。

「聴き方」教育と同じように、この柳田の言語獲得論は、戦前戦後を通じて、これも「一貫」していた。

柳田は、国語教科書づくりの頂点の時期、「思い言葉」というキーワードを提示しながら、次のようなメッセージを投げかけている。

「国語教育は昔から読み方と書き方の教育のみを重視してきて最も根本的なものを忘れていた。それは「思い言葉」の教育である。(略)すなわち自分の思いまたは感ずる

ことを、その通りに言葉で表現させる教育のことである。」

これは、昭和二十六年七月四日の『朝日新聞』学芸欄に載った「思い言葉」(『柳田国男全集』第三十二巻収録)と題する文である。続けて「言語に絶する」とか「いうにいわれぬ」という言葉を使いたがるが、それは、「思うことを思うようになさる」教育をしてこなかった従来者の国語教育の罪であると断罪し、「それがついに「言語に絶する」思いの敗戦に導いたことを考えると、「思い言葉」の国語教育における必要性が痛感されるのである」と結んでいる。

さらに、前述の「聞きことばの將來」とほぼ同じ時期に発表した「今までの日本語」(『教育研究』昭和三十年一月、『柳田国男全集』第三十三巻収録)では、漢語や翻訳語などの難しい言葉で理解したと思つているから、「僅かなボスの金銭や宣伝の力に動かされて投票するようになる」のだと述べ、次のように言う。

「すなわち国語をもう少し口語で表現し、口語で直ぐ受け取れるように改良しないならば、日本の国はもつと悪くなる、しまいには国がなくなるであろうと私は考え

ている。」

では、どうすれば国の滅亡を防げるのか。柳田は、国語教育の現場に立つ教員たちに、「これだけのことは暗記して帰れとか、或いは読めれば国語は満点だ」と言う教育ではなく、「耳で聞いたことが直ぐ腹の中に入つて一つの事実の認識」になるよう「人間を正しく判断させる力」を子供に養うことを望むと力説するのである。

これらの文章を発表したのは、柳田八十歳前後のことだ。「今となつては残念ながら年寄の世迷言」と述べるにいたつて居る。この時の柳田の悔しさに共感することなしに、現代の重要課題「コミュニケーション能力の向上」の道筋は開けないと、私は強く思う。

##### 五、「思い言葉」を豊かに

そして、私たちは、このスタート地点を確認した上で、新たな模索に乗り出さなくてはならない。ヒントは、「思い言葉」の復権であろう。

私は、柳田研究を続けるなかで、庄司和晃という希有な教育学者でもあり実践者に出会うことができた。そして、庄司の提唱する全面教育学に賛同する仲間たちと全面教育学研

究会を立ち上げ、現在に至っている。本文中の「私たち」とは、その研究会の同志たちを意識しているのと同時に、「三段階連関理論」という論理学の理論があるが、この柳田の「思い言葉」を三段階の中間段階と位置づけると、「コミュニケーション能力」の構造が見えてきて納得してもらえらると思う。

その三段階とは、「感じ言葉」↓「思い言葉」↓「考え言葉」である。そしてこの「↓」には、段階を上げるため、「どうして」とか「なぜなら」とか「比べてみると」や「ひと言で言う」となど多彩な「きっかけ言葉」があるのである。子供も大人もこの連関のなかで自在に行ったり来たりすることで、自然と「言語力」が付き、「コミュニケーション能力」は向上していくとの確信に至つたのである。こうして得た実践例については、また別の機会に改めて述べさせていたたくこととするが、いずれにしても、私たちは、柳田という「言葉あわせ」の達人から、まだまだ多くのことを学ばなくてはならない。

## 山桃忌短歌祭によせて

(思いつくままに記しました)

文化協会 井 奥 輝 明



“おまはん”ここにおったのか!!

昭和六十一年の八月初旬のことです。

第一回山桃忌の打ち上げが(財)

関西中小企業総合センターに於いて行われたことを記憶しております。

当時県から出向して、当センターに勤務しておりました私は文学園の主

宰木村真康師と久しぶりの再会でした。センターの和室四十畳の部屋に

は木村真康師、木村満二師、松田道別師、岸原弘明師、矢谷水青師、ま

た女性には川口汐子先生、岩朝加都良氏、北浄代氏、大野八重子氏等の方々

と記憶しており町関係者のご出席の方々が記憶にあります。

第一回目 一位入賞者夢前町大西豊子さんの短歌はつぎのとおりです。

工事場の宿舍の前に車より

レンタルの赤き夜具降ろしおり

小生は中学・高校在学中に詩歌を

ホンの少し嗜んでおりましたが卒業

後は疎遠のまま過ごしていたある日

大善寺の住職棟広照文氏つまり「西

賢治」と再会後誘われて文学園の誌

友となり刊行誌を購読するようにな

りました。棟広氏は同窓の一年先輩

で同じ柔道部に在籍し昵懇の交友関

係にありました。

福崎短歌会は文学園所属で福崎在

住の人たちが中心になり発足したも

のと思われまます。以後主催者が福崎

町文化協会内福崎短歌会が主催とな

り二十年数年の歴史をかさねる行事

となりました。

現在辻川山の短歌の森には第一回

・昭和六十一年から第二十四回平成

二十一年までの入賞第一席の短歌短

冊が役場職員の労力により短歌の森

に掲示されております。

第一回目から第四回目までは町長

賞の受賞短歌であり五回目から二十

四回目(平成二十一年)まで井上通

泰賞が受賞短歌として掲示されてお

ります。もともと山桃忌奉賛短歌祭

は民俗学の創始者柳田國男先生の功

績を称えて設立されたものと思いますが・・・?

柳田國男先生のご兄弟には著名な

方が多く、兄の井上通泰氏が国文学

者であり歌人でも著名な方であった

ので短歌祭の最優秀作品の短歌には

町長賞から通泰賞にかえられたもの

と思います。

また山桃忌短歌祭と並行して毎年

写生大会が行われております。幼稚

園・小学・中学生が対象者ですが、

入賞第一席は映丘賞に一昨年から変

わりました。

松岡映丘氏は、柳田國男先生の実

弟であり日本画壇の重鎮の人物です。

山桃忌短歌祭については前述しまし

たが、小生が棟広氏のお誘いにより

文学園福崎短歌会に入会(平成十二

年頃)と同時期頃に文化協会の入会

を県職OBの小林氏から紹介されて

入会したような記憶があります。

平成十三年・山桃忌奉賛短歌祭に

参加しましたところ松岡実氏より次

回から司会をやるように引導をわた

され第十七回目から不肖私めが奉賛

短歌祭の司会を努めさせていただ

いております。山桃忌奉賛短歌祭とし

ては毎年二百首以上の応募がありロ

ーカルの短歌祭としてはそれなりの

功績を上げているものと思われま

新しく生まれる結社、また解散消

失の会・結社等々ありますが、福崎

町短歌会は皆様のご支援ご協力をい

ただき今日まで継続出来ることを心

から感謝申し上げます。

第一回目から二十三回目までの選

者ほ川口汐子先生にお願いしており

ましたが、川口先生のご高齢と体調

が芳しくなく選者を退かれ後任には

川口先生ご推薦により昨年度(第二

十四回目)より楠田立身先生に選者

をお願いしております。楠田立身先

生は県歌人倶楽部の代表であり短歌

「象の会」の主宰者です。また日本

ペンクラブ会員でご夫婦揃って兵庫

県歌人倶楽部の幹事を努めておられ

ます。

第一回目から二十四回目までの山

桃忌奉賛短歌祭の通泰賞受賞者は、

小生の知る限りにおいて棟広照文氏

を含めて三名の方が鬼籍に入られて

おります。

全国的には俳句愛好者が多いよう

ですが結社の数や催事・行事等につ

いては短歌の方が多いように思いま

す。手前味噌でしょうか・・・?

今年には官中歌会始めの入選者には

ご高齢の方が多くお若い方が見当た

らなかつたようです。福崎町の短歌

会も高齢化がすすみ会員の歌会への

参加が少なく呷吟しております。皆様の中に短歌に興味を持っておられる人はご入会ご参加をお持ちしております。

四年前より“ふるさと文化祭”に新しい試みとして、書と生け花と短歌の朗詠を同時進行で行います。コーポレーションを企画しております。

第二十四回 平成二十一年

通泰賞受賞歌

あまたたび米磨ぎしかな日本の  
をみなに生れて厨事して

短歌 水野美子先生 書 藤本照子先生 朗詠 埴岡國利先生により  
第二十三回 平成二十二年一月 “ふるさと文化祭” に於いてお披露目しました。

次に小生のことで恐縮ですが少し述べさせていただきます。

“ふるさと文化祭” に於いてエンディングテーマ曲として “落葉” を取り上げて戴いており大変嬉しくまた心より感謝しております。

“落葉” 作詞 井奥輝明

作曲 松岡利久

二人は小学・中学・高校・竹馬の友として、別々の世界を歩いてきました。少し想い出しながら松岡利久君についてご紹介させていただきます。

松岡君は神戸大を卒業後、東京芸大の長谷川善雄師の作曲専攻に師事し卒業後は“美空ひばり”のバンドピアニストとして又ビッグサウンドのコンサートマスター等を努める傍ら作曲・編曲家に転向し、演歌の大御所として著名人となる。ヒット曲を少し・・・

鶴岡正義と東京ロマンチカの「小樽の人よ」は彼の影のデビュー曲と  
思う。

瀬川瑛子の「命くれない」はミリオンセラーを記録、他に坂本冬美・香西かおりの曲も手掛けカラオケの好きな人は曲を聴いただけで松岡君の手掛けた曲だと判るそうなの？

還暦を迎えてより本名を名乗り、叙情歌・叙景歌・シャンソンとジャンルを広げ、近頃は“金子みすず”の詩に曲をつけ各地でコンサートを実施しているようです。

つぎにこれも私事で誠に恐縮なんです。柳田國男に興味を持ち以前に柳田國男ゆかりの地サミット会議なるものが全国数カ所で行われておりました。その催しに参加して思いついた時に作りました詩に彼が曲をつけてくれた題名を少し列挙いたします。

(題名)

宮古島旅情 沖縄県宮古島

(題名) ひえつき恋唄 宮崎県椎葉村

(題名) 伊良湖岬旅情 愛知県渥美町

(題名) 遠野物語 岩手県遠野市

東京都世田谷区(サミット参加)

民俗学者の父と呼ばれる人 柳田國男の足跡をたどり、感動・夢・心・人・考え・思い・学ぶこと頼り、いろいろと詩を作りたいと夢を遠く馳せております。

また文化の魅力を紡ぎ出す地元(福岡町)の人達の努力意気込みが素晴らしく、辻川の夏まつりは辻川山・鈴ヶ森神社・柳田國男松岡家顕彰会記念館、歴史民俗資料館、大庄屋三木家周辺のクリーン作戦により辻川界隈の夏祭りを盛り上げております。

作家玉岡かおるの“銀の道一条”

が刊行されてより生野街道が銀の馬車道として新しく伝承文化が発掘されクローズアップされました、JR播但線・神姫バスに華々しく広告宣伝が行き交う毎日です。地元小学校、中学校の生徒とその保護者を中心とした劇団が創成され松竹新喜劇の渋谷天外さんの書き下ろし銀の馬車道が公演され大変な人気を呼んでおり

ます。銀の馬車道劇団の演じる明治初期時代の生活環境や人情を垣間見ることができ当時の文化を彷彿と感じます。(平成二十一年十一月にも福崎町文化センターにて上演)

柳田國男先生も黄泉の国でさぞかしお満悦されている事と想像いたします。

をさな名を人に呼ばれしふる里は  
昔にかへるここちこそすれ

山桃忌短歌祭に拘ることを思いつくままに記述してみました。加齢とともに耳はとなくなり日常生活は時の流れに沿えず、携帯・パソコンは殆ど手の届かない渦中にあり文章のなかに思い込みや記憶違いも多々あると思われませんがご勘案の上ご容赦願います。

ご判読ありがとうございます。

追伸

松岡君の極最近の活動情報ですが昨年十二月二十日に東京で“シャンソンの夕べ”とかを催し、遠野物語・伊良湖岬旅情・シャンソンの晩秋(この曲は神戸の街中の情景歌です)等をまじえたコンサートを開催されているようです。

## 「皇居清掃奉仕のおもいで」

福寿学園史学部 西村文麿



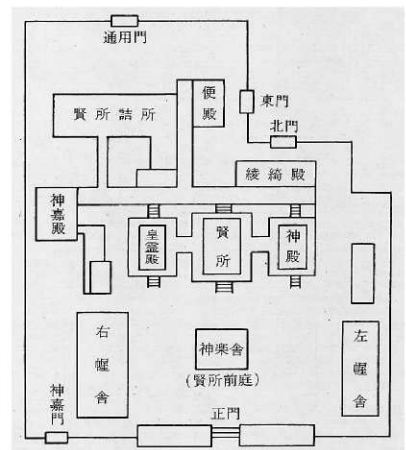
このたび第二十七回老人大学祭にあたり、私に体験発表をお願いしたいと指名を頂き、ささやかな体験ですが私なりに感動した体験を発表させて頂くことになりました。何分始めての事で身の引きしまる思いです。

私は平成六年十月と平成十年九月とに、夫婦で皇居の清掃奉仕に参加致しました。先づ皇居についての案内と奉仕の内容、そして、先輩から聞きました昭和天皇の御仁徳についてお話ししたいと思います。

皇居の面積は百拾五ヘクタール、赤坂御苑は五拾一ヘクタールです。皇居は、江戸城に明治二年に明治天皇が、京都からお移りになって宮城と呼ばれていましたが、戦後昭和二十三年から皇居と呼ぶ事になりました。

た。周囲は深い濠で、八つの門が入り口になって居ります。正門、坂下門、桔梗門、大手門、平川門、北桔橋門、半蔵門、櫻田門、宮殿は昭和四十三年完成、地上二階、地下一階、延面積約二万三千平方米、正月の参賀が行われる広場が東庭、宮殿が長和殿です。長和殿は、最長の百六十米、左の方に宮殿南車寄せがあり、訪問の国賓などの宮殿の表玄関です。私達も歌会始めに入選するこの玄関から招待されると聞いて居ります。

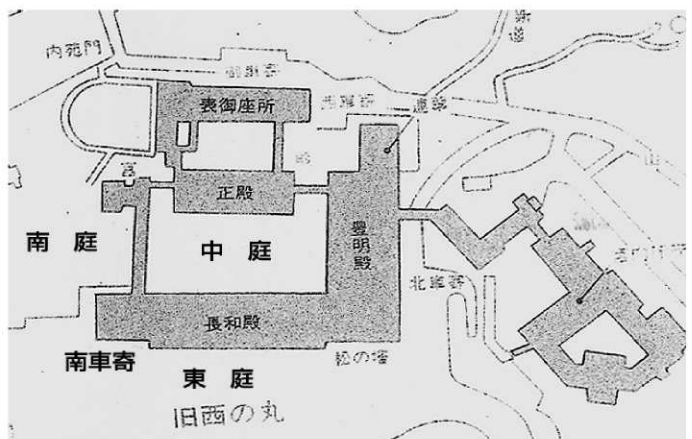
広さ約四千八百平米の中庭があつて、正殿中央に松の間、左に竹の間、右に梅の間と三室になって居ます。棟高は約二十米あり宮殿の中で最高です。棟の飾りの瑞鳥は高さ二、三米で気品があります。主に国の儀式、行事に使用されています。正殿の南に、天皇陛下が公務をお執りになる表御所があります。長和殿、正殿の北側に豊明殿があり、国賓の宮中晩餐会や、天皇誕生日の宴会等に使用されます。



宮中三殿

次に宮中三殿、賢所、神殿、皇霊殿で賢所は天照大御神、神殿には八神、天神、地紙、皇霊殿には歴代の天皇、皇后、皇妃、皇親をお祀りになって居ります。

拜む方向は伊勢神宮になっていきます。地震対策として、石を水平に敷きつめた上に基礎の石を置いて建てられています。吹上御苑の生物学御研究所があり構内に水田があり、もち米、うるち米等陛下が御手植えや稲刈りをされます。近くに御養蚕所があり、皇后陛下がまゆの生産をされて布に加工されます。その奥の吹上御苑に御所がございます。江戸城の本丸、二の丸、三の丸の一部の約二十一ヘクタールが皇居東御苑として宮中の行事に支障のない限り一般に公開されています。



次に奉仕について、姫路駅南口に集合してバスで上京、五泊六日。宿舎を七時半頃出発八時頃皇居前広場右手、桔梗門で、係員の方の指示に従って人員の確認等をすませて入場、窓明館に入って、手荷物等を各団体に毎にロッカーに入れて指示を待つ。全員が揃った頃作業の係の方に従って作業現場へ。途中小さな詰所から必要な道具を受け取る。作業は主に草刈り、草引き、溝の清掃など。正午前に窓明館に帰って昼食。午後は同じ係の方が来られて皇居の案内をして下さいます。作業の都合で案内

が午前中で午後が作業の時もありま  
す。雨の降った日は、案内だけで、  
午後は明治天皇記念館見学、靖国神  
社参拝等でした。平成六年の時には、  
天皇陛下がヨーロッパへ訪問されて  
留守でしたので、表御座所の南庭で、

男子は笹竹の剪定、女子は芝生内の  
雑草引きをしました。自然の高低を  
そのままの庭園で広々として落ちつ  
いた環境でした。園芸の拠点には、  
大小の盆栽が並べてあり、徳川三代  
將軍家光のお気に入り、背丈以上  
の立派な品がありました。宮中の  
行事に飾られると聞きました。平成  
十年の時、両陛下と和の宮様の拜謁  
がありました。各団体の長とお話が  
ありました。神戸の復興が進んでい  
ますかと震災の事を気づかっ下さ  
いました。赤坂へ奉仕に行った時に  
は、皇太子殿下と妃殿下の拜謁もあ  
りました。午後五時頃には終わしま  
すので、都内見学等も出来ず。N  
HKへ行った時、スタジオパークの  
中で、ドラマのセットを見た後、放  
送の体験コーナーがあつて、ラジオ  
放送の体験をさせて頂きました。○  
○地方の天気予報、二三行読んだら  
原稿を返して放送、見ると少し前の  
所に原文が表示されてありました。  
手許の原文が写し出されて居りまし

た。放送が終わったら西村アナウン  
サーと書かれた写真を頂き記念にな  
りました。国会議事堂も地元の方の  
案内で気軽に見学出来てうれしかつ  
たです。

次に昭和天皇の御仁徳についてお  
話し致します。東京の宿舎へ着いた  
夜、東京在住の先輩が侍従の方から  
聞かれた陛下の日常生活等を話して  
下さいました。陛下は常に国民の幸  
福と平和な世の中を祈って居られま  
した。

天地の神にぞ祈る

朝なぎの海のごとくに

波立たぬ世を

我が庭の宮居に祭る

神々に世の平らぎを

祈る朝夕

御製にこめられた平和への祈り。  
支那事変の始まる前に、日本人保護  
の名目で軍隊を支那本国へ派遣した  
事について、「どここの国でも自国内  
に外国の軍隊が居る事は好ましくな  
いと思う。だから軍隊を引き揚げた  
方がよいと思う」と話されたとき  
きました。軍を引き揚げていたら戦争  
はなかったと思います。

次は終戦の御決断によって本土決  
戦は無く平和への道が開かれました。  
もう一月も早ければとも思う事です。

マッカーサー元帥との会見の事は  
新聞等でご存知の事と思いますが「戦  
争の責任は全部私にあります。どの  
ように処分されてもかまいません。  
今国民は飢えに苦しんでいますから  
食糧の援助をお願いしたい」と話さ  
れたと聞いて居ります。帰られる時  
には、元帥も丁寧な敬礼をして送ら  
れたとの事です。

次に国民の事を思い質素な生活を  
して居られます。戦後復興が進んで  
暮らしがよくなってきたので、御所  
の造営をしようかとお伺いした  
時に、「全国で防空壕で生活して居  
る家族が無いか確かめて欲しい」と  
の事で、調べた所無い事が確認出来  
たので、「ありません」と答えます  
と、「それでは御所を建てて下さい」と  
と御返事があり、陛下の防空壕の生  
活が終わったと聞きました。テレビ  
が開発されて、陛下へ献上された時  
も「国内でどの程度普及して居るか」  
とお尋ねになり必要な時だけ御利用  
されたと聞きました。同じネクタイ  
をすり切れるまで使われて居られま  
した。陛下は着物を着られた事がな  
いので、ある方が陛下に着物を着て  
頂こうと会をつくって、おすすめし  
ましたが「二重になつてもつたいな  
い」との事で実現出来ませんでした。

だから昭和天皇は着物をきられた事  
がございませぬ。冷夏の時「今年は  
涼しくて暮らしやすいですね」と陛  
下に申し上げたら「そう、でも東北  
や北海道の稲作等大丈夫なのかね」と  
心配されたそうです。

天皇の言葉の意味の中に神に祈る  
人との意味が含まれて居ると聞いて  
います。私達は勤務が終つて家へ帰  
つたら、すぐ服装をかえて、くつろ  
ぎますが、陛下は表御座所から御所  
へ帰られても、宮中三殿に仕えて居  
られる女官から扉を閉めましたとの  
連絡があつてからネクタイを外して  
くつろがれると聞いております。夏  
の暑い日は、日が暮れて涼しくなる  
まで神様も暑かろうと扉が閉まりま  
せん。陛下は服装はそのまま居ら  
れます。宮中の祭礼は吹上御苑にあ  
る宮中三殿で行われます。陛下がお  
祭りあそばす大変重なお祭り大祭が  
年に十回程、小祭、掌典長をしてお  
祭りを行われしめられ、陛下が御拜礼  
になる形の祭りが十回程。毎月一日、  
十一日、二十一日の旬祭があります。  
更に侍従をして毎朝の御代拜があり  
ます。お正月元日、四方拜、歳旦祭  
と続いております。四方拜は御三  
殿の西側に続いております神嘉殿の  
前庭で行われます。午前五時半が四



方拜の時間です。約二百米程離れた御潔斎所で、冷水とぬるま湯を交互に何回も浴びられて、身も心も清められてからモーニングコートを召されて、御三殿の北側にごいます綾綺殿にお入りになり、そこで御装束にお召し替えになって、神嘉殿の南庭にお出ましになります。庭上に板敷の所があり表一面に白布を張ってありその上に、真薦を敷き屏風を立て、お座りになられる場所に、三尺角（九十糎四方）の厚畳の御拜座を敷きます。陛下はここにおつきになり、南西の方向、伊勢神宮の方向に屏風をすこし開けてありますので、その方向をまず御拜礼あそばされ、それから天地四方を御拜礼になります。これが四方拜でございます。そうして、賢所にうつりまして歳旦祭掌典長が祝詞をあげたのちに御参進になりまして、皇霊殿、神殿をあわせ、三殿に御拜礼になり式は終わります。その頃東の空が白みははじめ、庭燎（かがり火）と金燭（ぼんぼり）の明かりが次第に淡くなり新年の朝が訪れます。歳旦祭には皇太子殿下も三殿にご拜礼されます。四方拜、歳旦祭の行われて居る間、各皇族方は、各居間の窓を明けて、お慎みになつて居られます。秋の新嘗祭。こ

れは宮中祭典の内でも一番重いお祭りと聞いて居ります。八紘一宇、神武天皇即位の時に、大きな一つ屋根の下で家族のように暮してゆこうと言う肇国の精神、常に国民の幸福と安寧を祈つて居られる陛下、祈られている事に大きな感動を受け、朝の礼拝の時、両陛下と御皇室の弥榮をお祈りして居ります。このように良い国柄に生まれ生活出来る事に感謝して居ります。終わりにあたりまして、今後も健康で長生きして頂きたいと思つて「腹八分、くよくよするな無理するなおしゃれ忘れず毎日歩け」の詩をお伝えします。腹八分がよいとわかつていても中々実行出来ませんが、気づいた時に実行して下さい。おしゃれ忘れずは、もう年令だからと思わずにまだ若いと思つておしゃれしましょう。毎日歩く事がよいのですが、よく身体を動かす事です。私も整形のお医者さんに、入浴のあと痛い所まで曲げなさいと言われて実行して居ます。皆様の御健康と御活躍をお祈り致します。



## 付記

秋の新嘗祭。これは宮中祭典の内でも一番重いお祭りです。夕の儀と暁の儀があります。夕の儀は午後六時から暁の儀は午後十一時から午前一時まで行われます。まず、御祭服という純白の絹のお装束を召された陛下が綾綺殿をお出ましになり、脂燭（たいまつ）を持った侍従が先行し、宝剣を捧持する侍従について陛下がお進みになり、お後ろには陛下のお裾を持つ侍従、神璽（八坂瓊勾玉、三種の神器の一つ）を別の侍従が捧持し、お列が進み、神嘉殿の正面から殿内に陛下が入られる。陛下は一人でそこから更に白麻の壁代に金燭の灯がほのかに映える本殿母屋にお進みになり神座と相對し御座に正座される。これが夕の儀、暁の儀の二度行われます。この祭典は大祭です。すから、両方ともお告文があるのですが、その前に陛下が御自分で神座に神饌をお供えになります。これがなかなか、昔からのお手順が決まっております。柏の葉を重ねまして竹のひごでぬいきました格好の葉盤という皿のようなものに小盛りを盛りつけてお供えになるのですが、これが大変時間がかかりまして、ずっと御正座でその御所作をなさつてお

でになります。お供えが終わりますと、陛下の御拜は両段再拜と申しまして、起拜二度、次に坐せられたまま深揖、次に起拜二度をあそばされる、つまり再拜を二回、計四度御拜をなさいます。それからお告文。普段ですとお告文は掌典長が懐中して御奏上の時に差し上げるのですが、新嘗祭では最初からお持ちになります。お告文が終了しますと、「御直会」と申して神饌の米と粟との御飯と御酒とを陛下がお召し上りになられます。次に神饌をおさげして終了致します。

天皇さまとまつり 永積寅彦著より  
本文中の四方拜も引用致しました。



両陛下のお住まい「吹上御所」

地域の歴史遺産を守る

## 水害で被災した史料のレスキュー活動紹介

〜佐用町の水損史料レスキュー活動の体験から〜

神崎郡歴史民俗資料館 村上 由希子

はじめに

近年、日本国内をはじめとして、台風や水害などによる被害が各地で起こり、残念ながらその被害状況も甚大なものが多くみられます。

二〇〇九年八月には、台風九号による水害が兵庫県佐用町で発生し、多くのものが失われてしまったことは皆さんの記憶にも新しいのではないのでしょうか。

水害で被災したものには、地域の歴史資料も数多く含まれ、古文書や村絵図、民具や農具などの歴史資料をはじめ、役場の行政文書などがありました。

災害時において、まずは「人命や生活のライフライン確保」が最重要になります。しかし、被災した歴史資料のように、地域の中で大切に守り伝えられてきたかけがえのない記録は失ってしまうのではなく、救出することで守りそして未来へと繋ぐことができます。

今回は、この佐用町における水害

で被災した資料を救出するレスキュー

作業活動とおして、自然災害から地域の歴史遺産を守ることがいかに大切なことであるかを見つめることができればと願い、これらの活動についてご紹介させていただきます。

## 被災した史料のレスキュー活動

兵庫県には、阪神・淡路大震災後の被災歴史資料を保全する活動を行ってきた、「歴史資料ネットワーク」（以下史料ネット）という、歴史研究者を中心としたボランティア団体があります。

佐用町の水損史料レスキュー活動においても、この史料ネットの方々による献身的な取り組みが被災直後から行われ、被災地での巡回調査や史料救出、そして史料修復が進められてきました。私はこの史料修復が行われていた現場で作業に参加し、史料ネットの活動に触れることができ、修復方法をはじめ被災史料の実態、災害が起こるといことなどが、様々なことを学ぶことができました。

そしてこの体験を中心に記します。

まず、被災地で水損した史料は、自然水だけではなく、生活排水に浸かり被害を受け、カビや臭いが発生します。そして時間とともに乾燥が起こり、これらの史料は紙の変色や変形を起こしてしまいます。それゆえ、早期に廃棄される場合が多く、被災地に入り直面する現実として、史料は廃棄されてしまった後であるということが非常に多かったそうです。早期廃棄に至る要因としてはやはり、「水に濡れてしまった紙史料はもう使えない」という思いではないのでしょうか。

しかし、この史料修復方法は、「濡れた史料を元に近い姿に戻す」ことが「応急的に」「誰にでもできる」保全方法になります。

## 水損史料の修復作業

史料修復は、大きく分けて①クリーニング②補修の作業になります。

## (1) クリーニング

水損史料は、濡れたまま乾燥したため何枚も重なり固着しています。そこで、まずはじめに、この固着した古文書を一枚・一枚剥がしてからクリーニングを行います。次に、この一枚・一枚の史料の下に不織布を敷いて、エタノールを散布し殺菌し

ます。(写真①) このとき、できるだけシワなどは手でのばし、古文書の折れなども手で直します。この消毒を終えた史料の上に不織布を被せ、水道水で水洗いを行います。この水洗いでは、古文書についているゴミを洗い流すもので、ハケを利用し、水を切りながら流します。(写真②) 流し終えた史料は作業台へ移し水切りを行います。

作業台にはあらかじめ新聞紙を敷き、その上で作業を行います。まず史料表面の水分をハケで水切りし、次に新聞紙を利用して、史料の水分をあらかじめ吸い取ります。(写真③) 最後は、キッチンペーパーを使い、手の重みをかけながらゆっくりと吸い取り、史料を手で触っても水気が手につかない程度まで吸い取ることができます。史料表面の不織布を取り外し陰干しを行います。(写真④)



①アルコール水で消毒



②水道水で洗い流し



③作業台でハケを利用し水切り



④キッチンペーパーなどで吸水

## (2) 補修

クリーニングを終え、乾燥させた史料で、破れや虫損などにより補修を必要とするものは、史料補修を行います。

はじめに、史料の補修箇所を確認したのち、史料を裏返し、補修箇所より一回り大きいサイズの和紙を用意します。和紙は、手でちぎり、周囲をケバ立たせ利用します。(写真⑤) この和紙は、洗濯糊を水で薄めた糊を筆で付けます。そして史料の



⑤和紙の周囲をケバ立たせる



⑥補修穴に和紙を貼り付ける

補修穴に和紙を貼り付け補修は完成します。(写真⑥)

史料修復の作業を終えて

このようにして、被災史料の修復作業は続き、元に近い姿を取り戻していきます。ここでは、原稿の限りもあり簡略化した形ではありますが、大まかな修復作業過程をまとめました。

この水損史料の修復作業やレスキュー活動については、史料ネットによる講習会や各シンポジウムなどで教えていただいたことがあり、二〇〇八年に歴史民俗資料館で開催した連続講座②においては、この修復ワークショップを町民の方と一緒に行いました。しかし、実際の現場で実践することは実習とは違い、その現場で整う作業環境や実際の水損史料に対して柔軟な対応をする順応性が必要でした。

またこれらの修復方法は、決まった形があるのではなく、被災地での作業を続けてきた史料ネットの活動により改良が重ねられてきた努力の証しでもあります。そしてまた、これらの作業には、現地自治体の職員や整理作業員の方々も携わり被災地での修復活動が行われていました。自らも被災した現地の方々、この

活動に取り組む姿から、「地域の史料を救いたい」という強い気持ちを感じ、私たちのような外部参加者にできることは、少しでも現場の負担が軽減されるお手伝いなのではないかということでした。

私が活動に参加したことで、この体験を活かすことは、活動で学んだことを福崎町に持ち帰り、一人でも多くの方にこれらの活動を知ってもらうことでした。情報を知り、取り組みを理解いただくということは、実際にこのようなことに直面したとき、現地においての初動体制を早期に整え準備・対応できる自治体づくりであり、「平時における取り組みを怠らず災害に備える」日常からの防災対策が重要になるのではないかと感じました。

おわりに

私がこれら史料ネットの活動に興味を持ったことの一つが、私自身が阪神・淡路大震災を経験したことでした。まだ中学生だった頃に感じたことはごく単純なことで、水や電気、ガスの使えない生活の不自由さ、そして何より突然奪われる尊い命。つまり冒頭述べた、災害において第一優先される「人命と生活のライフライン確保」の必要性でした。

しかし、これらが最優先される被災地において、史料ネットの活動は地域の歴史資料を守るといったものでした。

時を経て、私は現在資料館に在職し、地域の歴史や文化を肌で感じ、そのかけがえのなさともぐもりに触れています。

災害において最も優先されるもの大切さと、後回しにされてしまうもののがけがえのなさ。この両面を知った今だからこそ、史料ネットをはじめとする、被災地での史料レスキュー活動に興味を持ちその大切さを痛感しています。

もうまもなく、神戸では震災から十五年目の朝を迎えます。

今回ご紹介させていただいた、佐用町における水損史料レスキュー活動は、私自身の被災体験と重ね合わせ考えることもできました。

この貴重な体験を、今回この場所をお借りして記す機会に恵まれたことに感謝し、次また新たな巡り合わせがあるのではないかと希望を感じながら、結ぶことができそうです。

(参考文献)

『水損史料を救う 風水害からの歴史資料保全』松下正和・河野未央

二〇〇九年 岩田書院

被災地において活動を続けてこられた松下正和氏、河野未央氏をはじめ、被災地自治体職員や住民の方々、これらの活動に尽力されている全ての方に敬意を表します。

### 水損史料「三」展示の案内

「水損した歴史遺産を救う  
—2009台風9号豪雨被災古文書を中心に—」

五月五日（水・祝）まで、兵庫県立歴史博物館では、今回ご紹介した佐用町を中心に行われた水損史料レスキュー活動や救出された資料を紹介する展示が開催されます。  
ぜひこの機会に、活動の様子や実際の資料などをご覧ください。

会期 平成二十二年

五月五日（水・祝）まで

会場 兵庫県立歴史博物館一階

歴史工房室（無料ゾーン）

【姫路市本町六十八番地】

観覧料 無料

主催 兵庫県立歴史博物館

歴史資料ネットワークなど

問合せ 兵庫県立歴史博物館

☎079-288-9011

### クラブ紹介

## 文化の向上とは？

公民館（絵画）クラブ

山本泰毅

◆絵に出合ってもう四十数年、小学生の頃からそのまま、担任の先生が絵の先生であった。その後、今まで私の絵の先生であった。私の絵は自己流である。でも初めて今はプロの先生にお世話になっている。プロの先生でも満足な作品はそう出来ないと言われる。まったくその通り何十年これといった物は描けた事がない。少しも上達した様に思えない。実は今悩んでいる。習い事とは実に奥が深い上が見えない。習い事とは全てそういうものらしいが今更自分の無力さがわかる。そして同時に絵というものの深さを痛感する。

◆絵を描いていると物の観方が変わる。描かない人が画題物を用意するとき草花の枯れた葉を取り除く。私には枯れた黄色がかったその色が邪魔にならない色数が三色は増える。又変化が出る。一面青い空、これも美しいだろうが白い雲、黒い雲、赤い雲があるほうがいい、絵がうごいている。



◆白い壁の剥がれ落ちた倉を探して歩く。以前作り酒屋を描こうとその家をお願いした。しかし断られた。その建家は壊れかかり荒れ果てていた。その為である。仕方なく自分の事務所があるビルの屋上からその屋敷を描いた。その絵は賞を受けた。もう十九年前のこと、審査の先生の批評を後で聞いた「このレンガの煙突の曲がっている所が実に面白い」と言われたら嬉しい。そんな所を褒められたのが意外であった。絵とは写真ではない、自分流で自由に描けばいいのだから、でも習い事には全て基礎がある。それぐらいは誰でも解る。あのピカソも元は今の様な絵で

はない、今の絵を発明した。蟬は殻から抜け出して楽しそうに鳴いている。私は未だ脱皮できずもがいている。でも奥が深いから面白いのである。

◆おもしろくないのが今の世相。官僚、政治、政治家にもいい絵を描いてもらいたいものだ。世相といえは今の時代子どもを育てられない親が多いように思う。人を動物に例えるのは語へいがあるが犬を訓練するのは若いうち。言うことを聞かなければ叱る。うまくやれば物をやる。片手にムチ、片手に飴。小さな子どもは善悪がわからない、口うるさくてもいちいちその都度教えなければならぬ。しかしそれは、中学生の頃まで、後は黙って見守るしかない。その年になれば善悪は既に備わっている。何が大事か、何をしてもよいが要はその責任を取れるかということとであろう。もう大人ということを持たせなければならぬ。愛情を持つて厳しく。私はそう育てられた様に思う。

◆私の尊敬する一人、中国三国志で蜀の劉備に仕えた、諸葛亮（孔明）が残した言葉「我が心秤の如し」秤のごとく両方つり合う様に、物事全て公平に判断しなければならぬと

言っている。自分を中心に物事を考える前に半ば相手の気持ちを察しれば正しい答えがでるのではないかと結婚して二人も子どもが生まれるともう一人前と勘違いしている親が多い。この時点でもう発展はない。習い事でそれはよく解る。なかなか一人前にならない、生きていくことは難しい、一生勉強ということか。こういうことを考えさせられるということが文化の向上を推進することなのだろうか。と偉そうなことをいろいろ言ってきた私のだが・・・」。

## 福崎町児童合唱団 団員募集中!!

福崎アルコバレノ児童合唱団

長谷川 隆 子

福崎アルコバレノ児童合唱団は、二年前結成しました。以前から福崎町には、何故、児童合唱団がないのだろう。児童合唱団があればいいなという想いで結成しました。

「アルコバレノ」は、イタリア語で「虹(にじ)」です。

にじ色にキラキラ輝く子ども達の歌声を、福崎町に響かせ続けたいという思いで名付けました。二年前に

結成したばかりで、まだひよっ子ですがパワー全開で、楽しく頑張っています。



今までの活動としては、春と秋の

「福崎町公民館クラブ発表会」老人ホーム「泉の杜」夏祭り慰問、エルデホールでの「ファミリー・リトルコンサート」出演、「ふるさと文化祭」出演させて頂いています。合唱だけでなく、以前オペレッタ「三匹の子ぶた」をしました。只今、オペレッタ「シンデレラ」の練習に奮闘中です。

子ども達のパワー・今は七人なのですが、その団体の中の優しさや気持ちい合わせ、伝えようとする表現力の、大人と違った自然さ、素直

さ、純粹さに感動します。

にじ色にキラキラ輝く、福崎っ子達、みんなのパワーで、福崎町をにじ色の元気な歌声であふれた町にしようよ!!

月に三回土曜日午前十時から午前十一時半、文化センター大ホールで練習しています。一度、遊びに来て下さい。

## クラブ活動によせて

ちぎり絵クラブ

橋 本 富貴子

私が始めてちぎり絵に出会ったのは、今から四十年前、病気が上りに、今は亡き中野はる先生の展覧会を見たのがきっかけでした。

和紙をちぎってその風合いを生かした素朴で温か味のある美しい作品に触れ感動致しました。そのときの印象は今でも忘れることが出来ません。その後、文化センターにちぎり絵クラブが出来、先生を講師として、月一回の稽古を楽しんでいます。

当時ちぎり絵はまだ珍しくて、福崎はもとより神崎郡内、生野町、姫路方面からも会員がありました。後年各地に教室が増えましたのと高齢化も伴い、ただ今は十名の会員が毎月一回第三土曜日の午後一時から四

時まで、それぞれ好みの教材によって楽しく稽古が続けております。

自分は絵心が無いから駄目だと言われる人がありますが、無くても貼って見たいと思われれる気持ちがあれば六十の手習い七十の手習いでも上手になれます。一つの事を努力して頭も使い指先を動かすことは、老化防止にも効果があると言われています。

コミュニケーションの場として笑うことも多くストレス解消にもなるようです。クラブの年間行事として秋の文化祭には、日頃の作品を展示発表させて頂いたことになっています。私たちは新しい方の入会されるのをお待ちしております。



# 福崎町文化財探訪記③

福崎町教育委員会 林 彰彦



岩尾神社

登り始めてすぐ左手に百町池という名前の池が見られます。名前の由来はさることながら百町部の田を作ることが出来る池ということなのでしょう。その池を過ぎ山道を登っていくと再び下り坂に上り坂と続き

小春日和の続くある晴れた日、ふたたび歴史探訪に出かけます。神積寺から南を見ると神社が見えます。岩尾神社という神社で、古くは神積寺の鎮守社であり、別名「文殊堂」とも呼ばれていたところだそうです。この文殊堂には、文殊堂には、文殊菩薩が祭られ、文殊会式もここで行われていたということが絵馬などでも知られています。

拝殿に行くまでに、石橋と鳥居を通るのですが、説明によれば、鳥居は慶長16年（一六一一）に姫路城主の命によって寄進されたものであることがわかりました。神社を参拝した後、谷に続く東側の田の方に足を運びます。

この周辺には道路を造る際に切り崩した地肌が見え、この中のいくつかには小さな化石があるそうです。海の中にはいたもので、ここが古くは海の中であつた証明にもなりません。長い年月をかけて遠くの海からこの地まで大地が動いてきたのでしょう。

途中の展望所を過ぎて右手に梵鐘のあるところに着きました。そこから左手に続く道があり、そこを通ると日光寺の本堂へとつながります。日光寺の本堂の先には双眼鏡が設置してありお金を入れて景色を楽しむことが出来ます。瀬戸内海や明石海峡大橋までも展望できるすばらしい場所でした。



日光寺・本堂

くだりは、旧の山道を通ってみることにしました。上ってきた道に切られるように古道がありました。両側には、ヒノキなどの樹木が茂り昼でも薄暗い感じのする細い道でしたが、急なところもあり、慎重に降りていきました。降りたところは、小さな堂があり、この集落で祭られている地藏堂ということがわかりました。

この堂を後にして、右側（南）に向かつて歩いていくと今度は神社が見えました。この神社は亀坪にある大蔵神社ということでした。地元の方に聞くと元は山の中腹にあったのですが、今はここに祭られているとのことでした。

道を進むといくつかの分かれ道があります。右側の道をすすみます。すると、新しい日光寺の登山口の場所に着きました。この道のすぐ左手（南側）に峠に続く道が見えます。地元の方に聞くと「あかさか峠」というそうです。「あかさか」とは全国的にいろいろな理由で名付けられています。ここでは次のようなお話が伝わっています。

「むかしむかし、このあたりで戦がありました。この峠でも戦いがあり多くの人の血が流れました。その血

で染まった峠は遠くから見ても赤く、赤く染まった峠ということであかさか峠といわれるようになりました。祠を祭りその霊を供養しています。」

その峠を越えていくと、大門という集落に行き着きます。集落は右手に見えますが、今回の探訪では、大門集落にはいかずに左手の西大貫集落に向かって進んでいきましょう。

山に隣接する道を進み西大貫集落に入る手前に、一つの標識が目に入りました。そこには相山古墳という名前が見えました。その方向に進んでいくと、西大貫の墓地为ぬけて山頂へと進みます。山頂には、こんもりとした塚が見えました。その塚の上には焼き物がのせてあり、よく見ると円筒埴輪と呼ばれるものでした。

説明板からすると、古墳時代の6世紀初め頃のものであり、調査に基づいて復元したということです。また、円筒埴輪は、地元の方によって制作されたものを並べているとのことでした。

この山から南側をみると平野部が一望でき、有力氏族の始めていたところが見渡せるでしょう。当時の有力氏族の気持ちになれる気がします。本日は、山登りに始まり山で終わりにします。古墳時代から江戸時

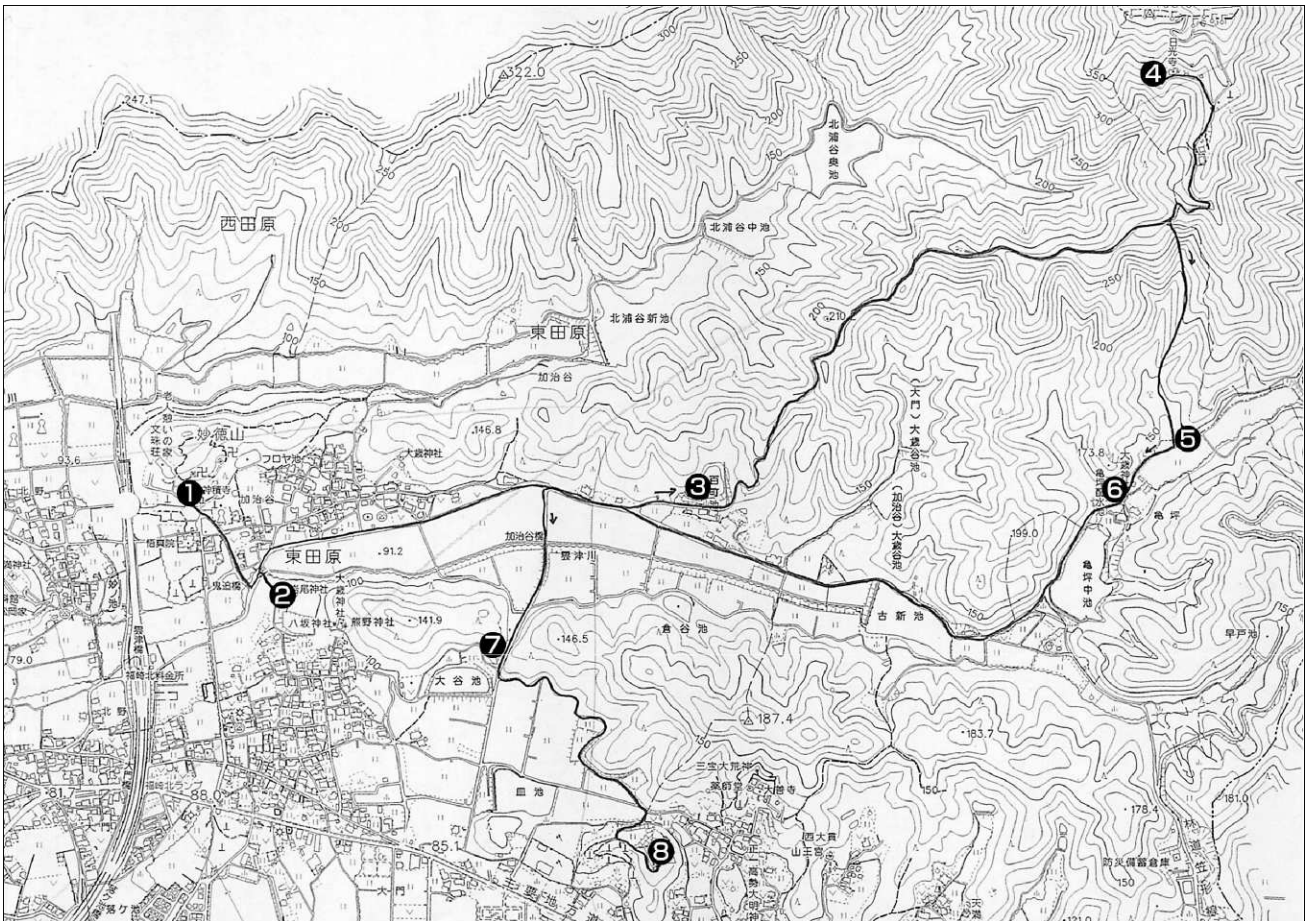
代にかけて歴史探訪をしましたが、暖かない一日でした。又の機会にお会いしましょう。



相山古墳

福崎町文化財探訪記③ポイント

- ① 神積寺
- ② 岩尾神社
- ③ 百町池
- ④ 日光寺
- ⑤ 亀坪地藏堂
- ⑥ 亀坪大歳神社
- ⑦ あかさか峠
- ⑧ 相山古墳



## 第二十八回 町展作品募集

第二十八回福崎町美術展（公募展）の作品を募集します。皆様方のご応募を心よりお待ちしております。

**\*会期** 五月二十一日（金）～

五月二十三日（日）

**\*会場** エルデホール

**\*部門** 日本画・洋画・書・写真・彫塑工芸

応募は一部門一人一点、未発表の作品に限る。

**\*作品搬入**

五月十五日（土）

午前九時～午後四時

**\*審査員**

日本画	雲丹亀利彦
洋画	坪田 政彦
書	大槻 芳岳
写真	土田智代子
彫塑・工芸	水田 文夫



## 山桃忌奉賛 第二十五回短歌祭作品募集

柳田國男先生と井上通泰先生の命日にちなみ、両先生を偲ぶ会として、毎年八月に柳田國男・松岡家顕彰会により山桃忌が行われています。

短歌祭は文化協会と福崎短歌会により、山桃忌当日行っています。

本年の短歌祭は、左記の要領で作品募集の予定です。

**記**

**日時** 平成二十二年八月上旬

**場所** 柳田國男・松岡家顕彰会

記念館二階

**主催** 福崎町文化協会・福崎短歌会

**作品** 未発表のもの・一人二首以内

**応募料** 一首につき五百円

現金又は小為替

**要領** 原稿用紙に楷書で縦書き

**宛先** 福崎町文化センター内

文化協会事務局 宛

**締切** 平成二十二年六月三十日

**賞** 通泰賞・町長賞・議長賞・教育委員会賞・顕彰会賞・文化協会賞・商工会賞・JA兵庫

西賞・神戸新聞社賞の各賞と佳作数点

佳作数点

佳作数点

佳作数点

**選者** 楠田 立身先生

（兵庫県歌人クラブ代表）

## \*表紙の写真\*

福崎町立神崎郡歴史民俗資料館

（旧神崎郡役所）県指定文化財

この建物は、明治十九年（一八八六）、神東・神西郡役所（明治二十九年（一八九六）に神崎郡役所と改称）として建てられたものです。

現在は、建物を移築・復元し、神崎郡歴史民俗資料館として開館。館内には、郷土の歴史資料、生活用品や農具などの民具資料などを展示しています。

木造二階建ての堂々とした外観を持つ洋風建築は、明治の薫りを感じることができる、優れた近代化遺産の一つです。

## 編集後記

たくさんの方々のご協力により、第二十六号を発刊することができました。

玉稿をお願いしました皆様方には大変お忙しい中を、快く執筆、ご協力くださいまして、本当にありがとうございます。

皆様方には、心からお礼申し上げます。

